
歌うたいの恋歌

風間咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歌うたいの恋歌

【Nコード】

N7745L

【作者名】

風間咲

【あらすじ】

あの日は、ビルの谷間から、身を投げた。死ぬつもりだった。灰色の闇に飲み込まれる前に、かけらでも、自分が残っている間に……。身を投げた直後、異世界への歪に飲み込まれた。そこで終わっていたはずの歯車が、また動き始めた。それは神が気まぐれに差し出した、一度きりのチャンス。それは、彼女にとって、絶望になるのか、それとも希望となるのか。

ダークファンタジーです。

矛盾的な願い（前書き）

残酷な表現があるかもしれませんが。

15歳以下の人は、絶対見ないでください。

矛盾的な願い

心に、埋まらない灰色の闇があつて、それは静かにでも確実に私の心を侵食していった。

何が悲しいわけでもないのに、なぜか虚しくて、辛くて、苦しくて、発作的に、死にたくなることがよくあつた。

小さい頃望んでたことは、ずっと同じ、自分をただ一人として見てほしいということ…。

誰かのついでじゃなく私だけを見てくれるそんな人が欲しかった。

そしたらね、こんな私でも少しは、存在してもいいと思えるから、

でもそれは秘密の願い、かなうはずがない願い。幼かったころの願い。

ねえ皆が私を幸せというの、私は幸せだよな？ これ以上願うのは贅沢よね？

でも、みんなに幸せと言われる私が、幸せでないのは、私が悪い子だからなの？

そうね…。きつとそう、いつもそうなの、私がすべて悪いの…。

だからね、幸せな振りしてた。ふりじゃないわ、だって私シアワセヨネ…？

みんなが幸せというんだから、私は、シアワセよ。

矛盾している思いは、心の奥の方にしまつて、隠してなかったことにした。

必要とされている私こそが本当の私よ、

弱くて、欲ぶかくて、そんな私なんていらないわ、

どれが本物なんていいじゃない、

自分なんて捨ててきたわ、捨てきれないものは、

心の奥の方誰にも覗けない場所の、箱に詰め込んだ。

でも虚しいの、痛いの、苦しいの、なんでなのかな？

私は、昔の私じゃない、望んでた自分を手に入れた。本当の自分なんてとうに忘れた。

なのに…なんでこんなに虚しいのかな？

ずっとその答え私知ってたわ。でも見ない振りしてた、

だって私、結局何も手になんていれていないじゃない、

本当の自分じゃないの。だから、笑顔の下で絶望してた、いつも…。

結局私の中は空っぽ、なにもない。

おかしいわ?...なぜかしら、みんなに望まれるように生きてきたはずなのに、

それが、セイカイなはずなのに、私、心が痛い。

みんな大切な人ばかりだけど、気づいてくれるほどには、私なんか見てないみたい。

私どうすればいい?自分が大嫌いな私、肯定してくれるみんなに、望まれるように生きてきたわ。でもね、もうこれ以上それができそうにないの。

私って、なんでこんなにも出来ないの?すべてが駄目なの?

自分でも愛せない自分、汚い自分をだれが愛してくれるわけがない、

望まれてる仮面さえも被れない...

私はどうすればいい?誰か私を肯定してくれなくちゃ生きていけない、

でもこのままじゃ、生きていけなくて、

じゃあ私は、自分を許すために最後ぐらいきれいに、死ぬことにするわ...

異世界の風（前書き）

残酷な表現が、含まれています。

15歳以下の人は絶対読まないでください。

異世界の風

異世界への扉は、わたしが死のうとした瞬間開けられた。

奇跡だった、だからあの時に私は一回死んだ。

私は、あの日ビルの隙間で気づかれることなく、死んでいたはずだった。

気がつくと体の下には堅い感覚、目を開けて、顔だけ上にあげるとそこは、

見通しの良い丘のような場所だった。

ここは、死者の世界なの……？

死んだら、すべて忘れられると、思っていたのに……。

記憶も、感情も、あの時のまま、

何かがおかしい……。そんな違和感だけあった、

だけど、その違和感の正体を私はつかめずにいる。

心にしこりを残したまま、ふと体を持ち上げようとすると、

体中にズキっとした痛みが広がった。

え、死者の世界には、痛覚もあるの？

おかしい…。何か絶対におかしい、私は本当に死んでいるの…？
痛む頭を抱えながら考えた。

私の思い違いでありますように…願いながら、もしそうだったら私は……。

「あ……。」

思いました。私は地面に打ち付けられる前、何かにのみこまれた。

裂け目？と言うのだろうか、周りの景色をカッターナイフで切り裂いたような、

そこにのみこまれたと思ったら、ここにいた。

じゃあ…？うそでしょ…ねえ嘘と言って…。

堅い地面も、匂いも風も残酷なほどにリアルで、

恐る恐る左胸に手を当てると、ドクン…ドクンと心臓が脈を打っていた。

私は…私は、死にぞこなったのか…！

心から自分でも処理しきれないような汚い感情が、あふれだした。

「なんで…？ 死なせて…いやあ！ …ああ…し、死なせてよお

おおおおお！！」

絶叫した。もう息していることさえたえられない、

なぜ生きているの？なぜ私はここにいるの？

生きている意味などないのに！！！！

誰も私が生きていることを望んでない！！！！

最後だけは、きれいに死にたかったのに！！！！

なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？

自己嫌悪の渦、きれいに死ぬことだけが、唯一自分を許せる方法だったのに、

死ぬことさえ私は、まともにできないの？中途半端なままなの？

「どこ…？　ない、ない、どこよおお！！！！」

地面に這いつくばってカミソリを探す。

血を見ればいつも少しだけ自分に罪を与えられた気がして、

少しだけ、生きてることを許せるから、でも、どこにもない…。

そっか、今日は、持ち歩いているはずなどなかった…。

死ぬつもりだったんだから、最大の罰を自分につけられるはずだった

んだから！！

また、パニックになりそうだった。

だから必死に自分の太ももを拳で、何度も、何度も打ち付ける。

最後まで汚いのか！！私は……。

自分が生きているの…だれが、喜んでくれる？

きっと死んだとしても、少しの間気づかれない、

私が涙を流すように、私が死んだとき、涙を流してくれる人はいるの…？

きっといない…。絶望が私の心を支配して、

拳をどんなに、体に振り落としても、心だけは、虚しいまま、

満たされない乾き…喪失感、ただ心が痛くて、痛くて、

自分でも、何を求めているのか分からない。

なぜこんなにも、痛いのか分からない。

きっと私はちっぽけだったのだろう、大きな丘の上一人うずくまっ
て、

自分のことしか見えていなかった。だから、一瞬何が起こったのか
分からなかった。

顔をふとあげた瞬間にそれは起こった。

涙が吹き飛んでいった。髪が後ろに流された。

体が、驚きで硬直した。体に打ち落そうとした拳もだらりと垂れ下がった。

大きくて強い向かい風が、私の中を、心まで吹き抜けていった。

風に心を奪^{つば}われた。囚^{とら}われた。

この感覚は、なんていうの？何も考えられない…。

いや考えたくないの、今はただ感じたい、この風を…。

ほほに、温かいものが伝った。手でその滴をすくい取った、

え、これは涙…？悲しくないのに、なんで涙が出るの？

涙ってコンナニ温かいものなの？止まらないの…。

初めて目を開けることができたような、不思議な感覚…。

気づいたら、歌っていた。自分が何を歌っているのかもわからない。

出てきた言葉も、自分の知らない言葉、それでも、気にならなかった。

痛み、苦しみ、絶望、怒り、すべての思考も、ほんの少しの願いも

……。

吹き飛んだ。すべてが、歌になって、少しだけ大気を震わせて、風に流されて……。

生きてる意味

昔、大人になれば、生きてる意味って自然にわかるって信じてた。

だって大人たちはそんなことに悩んでるように見えなかったから、

きっと俺も大人になれば、この虚しさも、つらさも、苦しさも、

生きてる意味を知れば、いい思い出になって、笑い飛ばせる日が来ると、信じていた。

だから早く大人になりたかった。

でも、今、俺いわゆる大人ってやつになったらしいけど、

生きてる意味ってまだ分かんないんだ…。

心は、そのままなんだ。大人になるにつれ、

穢^{けが}れも沢山受けたけど…。

考えなくなかった、でも向きあわなければならなかった。

いつになれば大人になるんだろう？

いつになれば生きてる意味を知れるのだろうか？

その答えは、ないんだ。

だって、生きてる意味など、この世に存在しないのだから、
気づきたくなかったけど、分かってしまった。

あの時その答えを持つてるように見えた大人たちは、
今なら分かった、ただ諦めていただけなのだと、

生きる意味を知る前に、考える時間さえない、

ただ高速に流れる時の中で、流されて、ただ溺れないよう足掻いて
るだけ。

そんな日々、生きてる意味など考えることもなく、

同じ毎日を淡々と過ごしている。

ねえ？じゃあさ、諦められない俺はどうしたらいい？

心の時計は止まったままなんだ。

風の吹くこの丘は、今日も大きな風が吹く、

風を浴びて、ただひたすら願う、

連れて行ってくれ、この心ごと、俺の心を吹き抜けて、

自我などない風になれたら、俺は、少しは分かるだろうか？

死ぬ勇気などない、死ぬ覚悟などない、

だから、きつとこのまま、諦めきれない気持ちを積んだまま、

生きていくのだらうと、思っていた。

あなたに出会うまでは……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7745/>

歌うたいの恋歌

2010年10月10日14時29分発行